

第二期 第五十三号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2020. 12. 20 定有堂書店 発行

本屋トーク (Twitter 抄)

奈良 敏行

正直のゆくえ〜ジエンダーはない〜

三浦 永理

「深い学び」をめぐる II

松田 裕史

山陽道紀行①〜中国山地の麓より〜

芝野 浩貴

ジョン・レノンと生きる

萩原 俊郎

映画評「キーパー ある兵士の奇跡」

吉田 海将

セブザムライ

鳥居 貴彦

八代日記 (九)

齊藤 仁昭

「男」の死

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ

その五十二

内田 克彦

2つの音楽劇

秦阜 梅林

ヌーヴォー

あきの素生

流星群

ドラマメリア

…… 編集後記



本屋トーク (Twitter 抄)

奈良 敏行

(定有堂 店主)

いい品揃えです。ねとたまにレジで声をかけられる。呼吸が合えば、いい本をお買い上げです。ねと応答する。自分が大切に並べた本なので、ついなぜ購入するのですかと聞きたくなる。お近くです。かとも聞く。県外の方も多く、一期一会の話が弾む。なぜこの本がここにあり、この人がここにいるのか、と。(2020-53-01)

一冊の本の衝撃。ところどころ棚に記されている。ひとは本屋に本を探しに行く。でもあてもなく訪れることも多い。きつとなにか変わりたいという気持ちに引かれて足を運ぶ。自分を変えられる本に出合うこともあるし、ないかもしれない。そして忘れたところに立ち現れる本があれば、それは衝撃の一冊。(2020-53-02)

本が売れない。困ったと思う人は多様性の扉を開く。  
本でない商品に支援を求める。だんだん本もどきの世界  
に飲み込まれる。何を成功と考えるかの初心が消える。  
孤立無援で本を一筋と思えば失敗する。失敗したらなぜ  
いけないのだろうかと考える人は外部でなく自分を変える。  
そんな本屋はきつと勁い。(2020-53-03)

ブックシユ (bookish) という言葉が好きだ。本好き、  
書物に凝る。堅苦しい。学を銜う。実生活に基づかない  
机上の空論。非実際的で役に立たない。世間的には愛想  
なし。辞書にはそう記されている。普通少数派だが、本  
屋の中では治外法権で多数派に逆転する。ここではただ  
本屋好きと呼ばれるだけだ。(2020-53-04)

仏教書で世界観を探求していたとき量子力学の世界観  
と重なるのに驚いた。なぜ似通うのか。ある人は頭のいい  
人間が考えることは同じだからだという。賢い人はこ  
の世を包括的に統一する骨組みを求める。いつもの禅僧  
の方は缺(ハサミ)とカニのハサミは似ているけど違う  
でしょうと笑って答えた。(2020-53-05)

コロナの時代の災厄。ひとと人とのつながりが疎遠に  
なる。棚のトレーサビリティが消える。街角の本屋の棚  
づくりには、この土地にどうという読者がいてどういう本  
を必要としたか人の痕跡(トレーラ)が必要だ。本が並  
んでいれば本屋といえるわけでもない。人と人との関係  
の中に本が居場所を選ぶのだ。(2020-53-06)

わたしは中とじの冊子という形式が好きだ。背がない  
ので本とはいえないという説もある。本は棚に差して居  
場所を与えられる。冊子の居場所は棚ではない。情念は  
形式を待てない。本のように広く永く残る必要もない。  
背くところの性急さにつりあつたところに冊子が生まれ  
る。その不確かさに安住を覚える。(2020-53-07)

固定観念は言葉からはじまる。本屋の青空という言葉  
もそうだった。青空とはここでは強く肯定をうながすア  
イコンなのだ。本屋は青空。意識の拡張はとも心地よ  
い。なぜ拡張が生まれるのか。言葉は言葉と出合うこと  
によって言葉の言葉を生み出し、割り切れない計算を割  
り切ってしまう。青空の高みで。(2020-53-08)

違う成り立ち違う生き方というものがある。本屋のことだ。やりたいからやるという情念にはじまる本屋を理解することは難しい。果敢な本屋だからだ。自分の明日のいのちや先々の情勢がどうなるうと気にしない。やろうと思うことを思い切ってやるだけだ。本屋はここでは主語ではない。述語なのだ。

(2020-53-09)

2020. 11. 16

## 『16 日間の日記 29 日間の日記』

たぶんたぶん倶楽部 2020. 12

京都で暮らす四人のたのしい仲間。その交換日記が冊子になった。文庫本サイズのシックな造り。黒い厚紙の表紙にセピア色の本文用紙。この世に一冊だけ造られた冊子なのではと一瞬錯覚してしまう。定有堂でも販売させていたのだが、一冊だけ品出しして、そんな限定感を漂わせるのが似合うかも。本誌寄稿者の鳥居貴彦さんたちが編みあげた冊子だ。

「京都の町は碁盤の目。縦と横に通りが並び、通りと通りの間に向き合って町がある。人は北に上がり、南に下がり、西に入ったり東に入ったりしている。」鳥居さんはそんな書き出しでこの街を語る。京都に暮らす魅力がひしひしと伝わってくる。人がうごめくと空間と時間が入混じり重層化する。それを「レイヤー」と呼ぶと鳥居さんはかつてわたしに教えてくれた。

四人の仲間は清野龍 (ba hütte.) 涌上昌輝 (恵文社一乗寺店) 鳥居貴彦 (開風社 待賢ブックセンター) 面高悠 (灯光舎)。「本」の縁(えにし)でつながるレイヤーだ。

## 正直のゆくえ

『ジエンダーはない』

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

「ジエンダーについて語るなら、是非読んで欲しい本がある」と定有堂の奈良さんに古本を渡された。

『村に火をつけ、白痴になれ 伊藤野枝伝』であった。以前、どこかで目にしていた本であったのだが、読み終えた感想を言うなら、奈良さんに差し出されなければ、私はこの本を読もうとしなかっただろう。

伊藤野枝は、青鞥社のメンバーでもあった人で、最期は関東大震災の混乱の中で、アナキスト・大杉栄とともに暗殺された、彼のパートナーとしても知られる。著者である栗原氏は彼女の生き方に惚れ込み、一冊の本に仕上げた。

野枝という人をほとんど知らなかったということもあるだろう。しかし、私はガチガチに「すべき」に囚われている人間だから、周りに目もくれず欲望全開の彼女や、その奔放な私生活に潔さを感じつつも、「私、この人と

友達になれないだろうな」と思ってしまった。要は、女性から煙たがられそうな女性である。加えて、著者の抑えきれない野枝愛が私の気持ちに拍車をかけてくる。いや、知らないよ！ あんたの考えなんて！ と若干、著者である栗原氏の語り口が移ってしまった。

と言いつつ、栗原氏が野枝の考えを「はじめに行為ありき。やっちゃまいな」と表現していることは言い得て妙である。それができない人間のなんと多いことか。そのひとりはもちろん私のことだけれども。

男性と女性の不平等を解消するために新しい約束を取り交わすのでは不十分であって、そもそも世の中があまりにも要らない約束に囚われている。明治・大正と生きた野枝のたどり着いたのは、アナキズムの考えであった。そう考えると、彼女は徹底的に強く、徹底的に独りだったようにも思える。

野枝が大杉にあてる形で結婚生活について語った文章がある。

「それから、夫婦関係です。これも、従来はすっかり変わってきたというものの、お互いの生活を『理解』するという口実のもとに、お互いに、どれほどその生活

に自分の意志を注ぎ込もうとしていることでしょうか。そしてある人々は『理解』では満足せずに『同化』を強います。Better half という言葉がどれだけありがたがられているでしょうか。「『或る』妻から良人へ——囚われた夫婦関係よりの解放」)

そして、そうやって自らの個性を失う役割が女性に任されることを批判している。彼女がどこまでも自らの意志を見失わないように生きてきたかが伝わるような内容だ。

彼女には家庭があつたかもしれない。仲間がいたかもしれない。それでも、淡々と自らの意志を通して、役割をこなすことが一番重要だと考えていたのだろう。

真実、意志を通したのであれば、決して、人は孤独から逃れることはできない。たった一人の人間に過ぎないのだから。

このようなコロナの時代にあつて、私達は否応なしにひとりきりの一個体だという現実を突きつけられる。今まで普通に重ねていた交流の多くが、「不要不急ですよね」の一言で片付けられてしまう。大勢に群れて過ごしていた、ごまかしのきいていた時間は無くなってしまった。

そんな孤独の中だからこそ、私達は本当になすべきことを問われている。何より、自分自身が本当に望んでいること、混じり気のない意志を。

そう思つて振り返る時、私は社会から少しも自由になつていないことに気づく。適当に仕事をしていたいし、適当に結婚もしたい。家庭を築きたいし、キャリアアップのためにも、大学院に行きたい。私の「したい」が私の内側から湧き上がるものなのかと言われると、そうではないのかもしれない。それでも、ワクワクするのだから、私の「したい」には違いない。

そんな社会に迎合しないで生きようとする人もいた。そのひとりが伊藤野枝であろう。正直に生きた先に彼らは殺されてしまう。ならば、正直に生きても、静かにその炎を絶やさずに生きるのはどうだろうか。

社会は日々私達を取り込んでくる。私の半分はそれに疑問を持ちながら、流れる時の中で、社会に身を委ねてしまう。ただ、それでも私はそこそこに幸せに、そこそこに自由に生きて、したたかに自分だけの「したい」のために進めればいい気がする。それが、私の正直のゆくえである。

# 「深い学び」をめぐる II

松田 裕史

(高校教員)

外国語学習においてインプットとアウトプットのバランスをどうするかはいつでも悩ましい問題だ。それは、自らが学習者の立場でも、誰かに教える指導者の立場であらうと変わらない。

第二言語学習の研究においてはインプット仮説、アウトプット仮説、インタラクシオン仮説など色々な考え方があつた。日本の研究者の著作と読むと、そのほとんどは(かなり大雑把にまとめると)「インプット→インテイク(＝内在化)→アウトプット(インタラクシオンも含む)」という習得プロセスを提案している。

生まれたての赤ん坊を見ればわかるように、母親の胎内から出て一度も日本語を聞いたことがないのに日本語をいきなりしゃべりだすことはない。インプットがないところでアウトプットはない。これは当然、第二言語学習にも当てはまる。

しかし、「インプット→インテイク→アウトプット」

をそのまま授業プロセスに落とし込んで上手にできないことがままある。もちろん、それはそれでそれなりに授業らしいものにはなるし、英語をひたすら日本語に訳していく授業よりはましかもしれない。なぜ、インプットから授業を始めると上手くいかないことがあるのかと言え、生徒の側にインプットすべき動機づけの問題がないからである。どんな歴史的な名スピーチを紹介しても、インプットの必要を感じない生徒に対しては眠りを誘う子守歌にしかならないだろう。そのあたりの問題意識を言語化し、日々の授業で改善を試みた過程も読売教育賞に応募した論文の中で次のようにまとめてみた。

\* \* \*

現行の学習指導要領における英語表現IIの目標は「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。」である。具体的な言語活動としては即興のやり取りや、スピーチ、ディスカッション、ダイベート等を行うことが期待される。目の前の生徒を前にして充実した言語活動をいかに構想し、実践していくのか。それを考える指導理念としておおまかにPPP型とTBLT型の二つがあり、それぞれに利点と欠点がある。

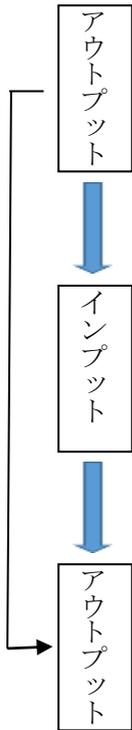
二〇一九年度、二年生を担当するにあたって、それぞ

れの利点をディープ・アクティブラーニングにおける学びの文脈に置き直し、新たな授業モデルを構築してみた。その際、特に溝上慎一（桐蔭学園）の内化と外化に関する知見を参考にした。

溝上は内化と外化を往還する学習サイクルが大切だと説いている。外国語教育の視点で言えばインプットとアウトプットの往還ということになる。



私はこれまで英語表現ではPPP型の授業をおこなってきたが、次の図のようにインプットとアウトプットが往還するような授業モデルで二〇一九年度の授業（英語表現Ⅱ）を実施した。



内化と言えば、芝野先生が高校時代に言われた「内圧」という言葉を思い出す。高一の時、一年上の先輩方が将棋の全国大会で団体優勝を飾られた。今から振り返っても快挙だと思うが、その話題に触れ先生は内圧の話をか

れた。「彼女たちの優勝は普段からの内圧だ。ぐぐーっ」と内圧！」

私は天才ではないので何か新しいものを生み出すには長い時間をかけたインプットというか内圧が不可欠だ。しかし、内圧がいつでも沸々と湧いて出ているタイプでもないの、あえて外圧を求めることもある。この場合、外圧とは比喩的に言う可他者の視線に自分を晒すことである。外圧を内圧に転化させて何とか動力の枯渇を予防・回避してきたような気がする。アメリカの詩人、エミリー・ディキンソンは生前はどこかに作品を発表する機会なんぞなく、日々、詩を紡いでいた人だが、そんな人のことを思うとその高貴さに頭を垂れるほかない。

#### (参考文献)

溝上慎一(2018)「内化・外化」

([http://smizok.net/education/subpages/aglo\\_00011\(naika\\_gaika\).html](http://smizok.net/education/subpages/aglo_00011(naika_gaika).html)) (2020年7月25日閲覧)

# 山陽道紀行

①

中国山地の麓より

芝野 浩貴

(地球探家)

1987年10月4日、アントニオ猪木とマサ斎藤のプロレスは、パンデミック期ではなかったが、無観客で行われた。場所が巖流島だったからだ。映画や演劇で巖流島が舞台になっても、なかなか本物の巖流島まで辿り着かないのは、日本軍の下関要塞地帯だったことが関係する。(吉川英治の小説の挿絵も許可を要している)今は山口側の唐戸棧橋(下関港)と福岡側の門司港から巖流島までフェリーも出ていて観光地となっている。

山口県の人にとっては近すぎて、何もない無人島に訪れたことのない人は多いが、私は下関がプロボノの拠点になってから、4度は訪れた。初めて上陸したのは、2013年8月、巖流島史上初めて授業が行われた時だった。無人島なので、生徒さんに通ってもらい、椅子や黒板や電気など運んで実現した。(下関市役所の許可は得ている)4度目はそれから7年後の今年9月、その時の講師

仲間と再会して別れた。下関は、古代山陽道の西端である。西国街道は京都の羅城門から下関の赤間関に至る道、宿場は50以上あった。その赤間神宮(安徳天皇が祀られてある)を過ぎ、関門橋の下(壇ノ浦)を潜り、瀬戸内海を東へ歩き始めた。潮流の流れで源平合戦を想いながら…。コロナ禍以降初めての長距離紀行(歩き)だった。山陽道に沿うわけだが、旧山陽道をそのまま歩くのではなく、基本的には2号線に沿うことになる。山陽自動車道と並走している。中国地区は、北東から南西に断層があり、大河も火山もない。

吉田松陰は「地を離れて人なく、人を離れて事なし。人事を論ずるならば、先ず地理を観よ」と言っている。海の道でもある。津軽海峡を避け、蝦夷地と江戸・大坂の物資交換に役立つ西廻りの北前船は下関で日本海から瀬戸内海航路へ転じる。北前船が運んだ鉄で農具、生活用具、刃物が加工され、人々の暮らしを支えたが、江戸時代の8割の鉄は中国山地の生産なので、たたらも山陰から下関で山陽へ流れ、都市へたどり着いたことになる。周防灘を右手に9号線を歩くと長府港で2号線と9号線の分岐点に辿り着き、そこからは2号線を進む。道歩きで大変なのは、川を渡る時と、山を越える時である。川を越える時は、橋につながる道を歩かねば何度も引き返すことになる。山を越える時はトンネルの中を進むか、

迂回してクネクネ道を巡る。知人のいる小月基地、小野田高校を訪ねる。日本で最初の小野田セメントは山口の大理石と小野田有帆川の泥土から産まれた。小野田人から見ると、自分たちは山人で下関の人は海人だと言っていた。豪雨が止みそうにないので湯田温泉まで避難。(湯田温泉は、教員時代平成元年から二十数年間、部活の遠征で生徒を運び続けた場所で土地勘はあった。部員以外の生徒をほったらかして部活遠征ばかりする教員にも、山陰の交通の便を理解せずに、生徒の文武活動の県外交流に際しての足を保障しない行政にも物申したいことはある。誰に謝っているのか：誰が誰に対して責任を負っているのか：)

萩往還の南側の防府から三田尻まで歩く。佐波川が流れるのが最大の防府平野。防府天満宮は、菅原道真が左遷された時立ち寄った場所であり日本初の天満宮。更に山頭火の故郷でもある。山頭火ふるさと館(平成29年開館)や山頭火の家は既に訪れたことはあるのでスルーして徳山目指す。富海付近はどんだん山に追いやられて(トンネルを渡ることとはできないから)、海沿いを歩き、湯野温泉で疲れを取る。

新南陽を過ぎて、数日前に知り合った塾長を訪ねる。下関滞在中に、わざわざ車で私達に会うただけに徳山

と下関を日帰り往復されたので110キロの「歩き返礼」をした。徳山駅は徳山港の側に作られているので、寄ってみたが駅そのものが本だらけ(図書館と書店が混在)でびっくりした。予備校が進出しにくいのは山陰と同じだが、塾の多さと本との距離が近い町には灯りがある気がした。子供たちの居場所の話である。

下関は北九州圏で岩国は広島圏。岩国から下関まで36里(150キロ)。大山から四国の石鎚山が見えるというが、中国山地では、分水界山地も低く、北寄りのため南の瀬戸内海への川が多い。広島地区の土壌は花崗岩と流紋岩で出来ているので、ミネラルがあまり含まれていない軟水が流れる。宮島の弥山は離れてみると女神が横たわった姿だと表されるが、それも花崗岩の生成の仕方が絡む。宮島は、瀬戸内海を挟んだ対岸の山陽の山から分離している。そう思っていると岩国界隈の道を歩きながら、左の山々を眺めると多くの人が眠っていた。さて、どう山陰側に出るのが問題である。

## ジョン・レノンと生きる

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

1980年12月8日。その日は鳥取駅に近い「うさぎや」というビジネスホテルにいた。

入室するなり、寒々とした漁港の風景を描いた油絵の小品が目にとまった。ビジネスホテルの壁を飾るには似つかわしくない本格的な油絵(実は早世した洋画家、亀田正一さんが経営していたホテルで、その後、亡くなるまで家族ぐるみで親しくさせていただいた)。

◇ ◇ ◇

だれひとり知り合いのいない土地の新聞社に就職した。入社は春なのに、急に出てこいという。貧乏学生にとつて京都からの汽車賃は馬鹿にならない。「なんだろう」と出向くと、いきなり新聞の拡張用紙を山ほど渡された。夜は夜で、宴会でカラオケを命じられ「私はカラオケなぞ歌いませぬ」と断ると、「お前は頭の固い男だが、よく断った」と社長らしき人から笑われた。

まあ、思えばこの時、その後40年にわたる私の会社人生の方向性は、決まったようなものかも知れない。

さんざんな一夜が明け、ラジオをつけると「ニューヨークでジョン・レノンが銃撃され死亡した」というニュース。まるで現実感がなかった。昨日から私は、どこか異次元の邪悪な「大人の世界」に迷い込んでしまったのだ。青春(というほど明るくも澁刺でもなかったが)が終わった気がしたのは、こうして学生時代の終わりと重なったせいもあるだろう。

◇ ◇ ◇

2019年のイギリス映画「イエスタデイ」は、突然、ビートルズが消えてしまった世界を描いている。

主人公(インド系英国人だが、声はポール・マッカートニー似)だけに記憶があり、友人に「イエスタデイ」を披露すると「いつそんな曲を作ったんだ」と驚かれ、「ロング・アンド・ワインディングロード」を歌うと、エド・シーラン(本物が出演)から「負けたよ。僕はサリエリで、君はモーツァルトだ」と激賞される。こうして世界的スターになった主人公だが、「お前の曲はすべて盗作だ」と告発する人間が現れる悪夢にうなされていく。

かくして初老の男女2人が楽屋を訪ねて来た。が、告発ではなかった。「ありがとう。楽しませてもらったよ。」



## 映画評「キーパー ある兵士の奇跡」

吉田 海将

(朝日新聞総合サービス)

席を立とうとすると、エンドロールの最後に映し出されたのは、手や体をありつたけ伸ばしてシユートを防ぐ往年のゴールキーパーの姿。座り続けて、改めてその数奇な人生に想いをはせ、余韻にひたつた。

公開中の映画「キーパー ある兵士の奇跡」は、ナチス兵として捕虜にされたイギリスに戦後も残り、サッカー・プレミアリーグで活躍した、バート・トラウトマンの実話を題材にしている。

ランカシャーの収容所で終戦を迎えようとしていたトラウトマン。卓越したサッカーセンスを偶然目にした、地元の弱小チームの監督が、収容所から連れ出し、試合に出場させてしまう。ドイツによる空襲で犠牲になった市民も多く、敵国の兵と一緒にプレーすることに反対する選手もいたが、降格の危機にあったチームは圧勝。試合に出場させ続けるために、監督は自ら営む食料品店で彼を働かせる。終戦後も彼はチームでプレーを続け、当

初はナチス兵であったことに反発していた、監督の娘と恋に落ち、結婚する。

現在はリーグ屈指の強豪になった、マンチェスター・シティの入団テストに合格するが、会見で記者たちからナチス兵であった過去を問われ、新聞で公にされてしまう。初めて出場したアーセナル戦は、地元のユダヤ人らファンによるブーイングの嵐だった。しかし、ロッカーームでチームメートは、彼を温かく円陣に加える。シティの青、アーセナルの赤。クラシックなユニホームは、現在のものを想起させるデザインだ。

チームも彼の起用に苦慮するが、彼はレギュラーとしてめざましい活躍を続ける。イギリス人の妻は、チームの本部に乗り込んで彼を擁護。チームを支援する、ユダヤ人コミュニティの指導者は「ナチスは恐ろしい罪を犯したが、直接荷担していない者まで糾弾すれば、我々も加害者になる」との声明を発表するにいたつた。

ハイライトはエリザベス女王も観戦した、1956年のFAカップ決勝。バーミンガム・シティの選手とぶつかり、頸椎を損傷するが、グラウンドに立ち続けて優勝を勝ち取る。なんとこの時の映像を、「YouTube」で簡単に見ることが出来る。けがをするシーンは、ゴール前の攻防で果敢にボールをとろうとする彼の姿をとらえ、実際の場面をリアルに再現している。

苦難を乗り越え、幸せをつかんだように見えたが、彼は戦争中に目の前で起きた「事件」を傍観したことに、罪悪感を抱え続けていた。そして、彼の大切な家族を思わぬ悲劇が襲う。

トラウトマンを演じた、ドイツの俳優デビッド・クロスは「お互いの違いを乗り越えるのに、スポーツほど力を発揮するものはない」と、パンフレットで振り返っている。楽しむことだけがスポーツではない。目の前にある憎しみや分断に対し、どのように向き合うか。選手だけでなく、ファンも含めてスポーツに関わる人すべてが問われていると思う。

# セブザムライ

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

「なんか新しいの入ってますかー」と近所の人がやってくる。この辺とかどうですか、と言いながら置いていた何冊かを出してみる。「そうそうこんなんすきやわー」と言いながらページをめくっていたかと思うと「これはいくら?」と聞く。この人が選ぶ本はいつも値札がついていない。百円とかそこの均一本、しかも洋書がいいらしい。イラストとか入っていると良い。他に買う人もいないので入荷したら適当に隅っこに積んでおく。気になったやつはその場で値段交渉。といっても二百円でいいですよ、とか、それはちよつと高いかなあ、とかそんなん。今日は珍しく値段のついた本を手とった。値札に目をやり「待賢ブックセンターって書いてあるけど、この店となんか関係あるの?」と聞く。ああ、その店がこの店ですねえ、とぼんやり答えると「ええ?」と聞き返される。うちが待賢ブックセンターなんです、ともう

一度いう。「あ、そうなんやあ。そうやったんやねえ」とやけに感心しているのでどうしたんですかと聞くと、ネットで名前は見てたけどここやと思つてなかつたらしい。「古本市とかたまに名前出てますよねえ」とかいいう。そうですそれがわたしです。

この人にとつてこの店は今までなんていう店やったんやろうか。名前のない店? なんか急に始めた本屋? 店名とかどんな店とか関係なく、ただ2週間にいっぺんくらいいぞいて、なんかあつたら買う。なんもなかつたら帰る。なんというか、なんだかとてもただしいなあとと思う。本質を見ている、というとおおげさか。ゴマカシが効かない緊張感。そういえばぼくもこの人の名前を知らない。あそこらへんのマンシヨンの人とか。どんな本が好きかはよく知っている、つもり。

店の前の看板には店名が入っていない。「本」と日に焼けたオレンジ色で一文字だけ。もらつてきた看板だから仕方ない。自分にとつては一文字で十分すぎるくらいたくさんものが詰まった看板だからそれでいい。店の中に入るとカードが置いてある。そこまできてようやく店名にたどり着く。ロゴデザインは矢萩多聞さんがやつてくれた。わりと気に入っている。鳥みたいなマークは甲骨文字の「風」をちよつと変えたものなんですよ、と

か聞かれたら答えることはたくさんある。この前カードを手にとった人が「セブザムライ？」と首を傾げていた。いや縦に読んでください、侍じゃなくて待です、と訂正するよりも、それおもしろいっすね、のほうが勝つてしまふ。その日からここはセブ侍でもある。正しくは「セブ侍ソツタク賢 1」である。最後なんて読むんや。

夕方、ヨレヨレの背広をきた五十くらいのおじさんがふらりとやってきた。マスクの中でモゴモゴと早口で話す。何を行っているのか分からない。え？と三回くらいいうと少し話すスピードが遅くなった。それでも何をいつているのか分からない。しばらくして地図に広告を出してくれ、という話であるかもしれないと思い始めた。

「社長さんはおられますか」とか言っているがそれには答えずいくらなんですとか、と聞いてみる。「この小学校の生徒さん全員と、自治会とで何千部かは配布します」という。いや値段は？ともう一度聞く。「各家に配布もしますしね」とまだなんか言っている。通販番組のあれなのかもしれないな、と思い始めた。いろいろいいことがくつついて、お値段なんと税込〇〇円！みたいなやつ。おじさんは「デザインもうちでやらせてもらいますし」とかまだ言う。何を言っているのかは分からないがちよつと面白いかもしれないなと思い始めてしまった。もう値

段とか広告とかどうでも良くなっている。「もちろんお代は完成してから頂戴しますので」と話し続ける早口のおじさん。後日、別の人が集金にきた。一万六千五百円。えらい高いやんか。

「どこそこの店の人はなんちゃらで修行してはったからちゃんとしてるんよ」とか「わたくしこういうものです、ちゃんとしてます」よりも、どこの誰か分からへんけどまあええか、くらいの方が伸び伸びできませんか。なんかめっちゃ汚いけどうまい、みたいな。何言ってるか分からへんけどまあええか、とか。何屋か分からんけどどういくねん、って。

そういえば今日はじめて行ったラーメン屋の焼き飯は洗剤みたいな味がした。店の名前は覚えていない。八百五十円。まあいいか。



# 八代日記 (九)

齊藤 仁昭

(元長崎書店勤務)

十一月某日

配達途中によく柑橘類の畑の脇を通る。眺めが良い。

緑が濃くて厚い柑橘の葉が好きだ。柑橘という言葉を使  
うと築地書館の『柑橘類と文明』という本を思い出す(2015  
年、ヘレナ・アトレー著、三木直子訳)。サブタイトル  
が「マフィアを生んだシチリアレモンから、ノーベル賞  
をとった壊血病薬まで」。面白そうでしょう。

築地書館の本はテーマが良く、書店員時代にちよいちよ  
い仕入れていたけれど、近頃は近刊や新刊をチェックし  
ていなかったのでウェブサイトをのぞいてみた。『海の  
極小！いきもの図鑑』『コロナ後の食と農』『小さな学  
校の時代がやってくる』など興味深いタイトルが並んで  
おり安心。

築地と言えば僧侶の友人の手伝いで築地本願寺にて音  
楽イベントを数回開催したのを思い出した。もう十数年

近く前だろうか。出演していただいたミュージシャンの  
面々を振り返ると畏れ多い。とてもいいイベントだった  
のではなからうか。特にエンケンさんのライブは折に触  
れて思い出すほど感動した。ご興味ある方はイベント名  
「他力本願でいこう！」で検索してみてください。

(築地書館のことも築地本願寺のことも前に書いたよ  
うな気がしてきた。そうだとしたらすっかり仕事漬けで  
過去の楽しかった思い出しが話せない中年になっている  
のだろう。ご容赦ください。)

十一月某日

もう十二月になろうかというのに部屋では半袖で過ご  
せるほどに暖かい。暖かい上にまだ蚊が出る。0歳児は  
蚊に刺されると自分で掻くことができないし、痒いこと  
について何がどう不愉快なのかもわからないためぐずっ  
てしまうので厄介だ。二歳児は痒いのにムヒを塗ること  
を拒絶するのでこれもまた厄介だ。妻は普段は暴力的では  
ないはずだが、蚊には血眼になって汚い罵り言葉を吐き  
ながら殺しにかかるのでたいそう面白い。

十一月某日

長崎書店のスタッフの結婚式に呼んでいただく。久し  
ぶりに社長とも会うことができた。長崎書店は来月から

リニューアル工事を行うそうだ。内容を伺うと、音信不通前号の奈良さんの言葉「破壊的本屋イノベーション」に通じるものを感じた。とても楽しみだ。

\*\*\*

誰か呼ぼうかな 一人でいいかな  
変わらない話をいつまで続けようか  
窓を叩くのはあの子じゃないのだ  
耳鳴りガーン 嫌な予感  
ループを続けてる 気がつけばいつでも  
そしてまたいつでも

天井にピタリ 壁に潜んだり  
窓の向こう 部屋の隅っこ そう何かが見えちまうぜ  
ドアを開けるのはあの子じゃないのだ  
耳鳴りガーン 嫌な予感  
ずっと前からそこに立って

群青色のおじいさん おいでおいで手をまねく  
そこに何かがあっても もう行こうぜ

カーテンがゆらり デイレイがかつてく  
声も出ない 音もしない  
動くことなど出来ませんよ

空気は静かに 冷たくなつてく  
あの子はダンス 真夜中ダンス  
ずっと前からそこに立って

（ケバブジョンソン「群青じいさん」 作詞：杉浦真寛）

# 「男」の死

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

あの事件のことは、TVニュースで見た記憶はあるものの、高い所で何やら叫んでいる男が映っているなあ、と思っただけで、何が起きたのか全く分かっていなかった。前年の、安田講堂落城も、戦争みたいだな、という位の印象しかなかった。所詮、小学生にはこの程度である。

意識するようになったのは、高校に入ってからのこと。『サド侯爵夫人』を読みたかったが、当時、新潮文庫には入っておらず、手に入るのは全集か戯曲全集のみ。とても手が出せる金額ではなく、学校図書館も頼りにならず、県立図書館でやっと思つて、箱入り単行本で読んだ。人物のアクションを殺し、台詞だけで話を進めるというスタイルはとても魅力的だった。

その後、『わが友ヒットラー』『癩王のテラス』『鹿鳴館』など、同図書館にあるものは皆読んだ。実際に上演もされているのだが、それ以前に、レーゼドラマとし

て卓抜した作品だと思つた。

散文はその後で、『仮面の告白』『午後の曳航』『禁色』など、文庫で入手できるものを読み始めたのだった。

古書の世界に足を突っ込むようになって、最初に買ったのが『聖セバスチヤンの殉教』(一九六六)である。作者は、ガブリエレ・ダヌンツィオ、翻訳は池田弘太郎との共訳となっているが、実際の役どころは修辞、潤色が専らであったようだ。文学書にしては珍しく美術出版社から出ているが、なるほど、泰西名画の中から、セバスチヤンの殉教図ばかりを集めたアート紙の図版頁がかなりの部分を占めていた。サイズも、A4変形の枳形本で、箱入り、本体は真紅の布装に大きく紋章をあしらった豪華なものだった。

セバスチヤンへの憧憬は、『仮面の告白』にある通りで、後述する写真集とも絡むが、このダヌンツィオという熱血詩人も亦、彼に大きな影響を与えた人物である。

徴兵検査で乙種合格、生きては帰れぬものと、生涯の一冊として万端整え『花ざかりの森』を上梓、入営したものの軍医の誤診により、即日帰郷を命じられるという不名誉は、恐らく生涯のトラウマになったと考えられ、それが後の肉体改造や私兵集団創設の密かな動機になっ

ていると思料される。

一方、ダヌンツイオは詩人にして軍人貴族。第一次大戦に志願して勇名を馳せ、フィウメを占拠、英雄としてイタリア中を熱狂させ、その全集は国家事業として刊行された。

ダヌンツイオになりたかったのではないか、そう喝破したのは筒井康隆だ。もう三十年も前の著作だが、屈折した心理を、これ程的確に抉った評論はないと思う。

さて、セバスチャンである。

一九六八年、「血と薔薇」という一風も二風も変わった文芸雑誌が創刊された。B5変形というサイズも異色なら、上質の紙に写真、図版を多用した、文学と美術が混淆した趣も異色であった。編集者が澁澤龍彦という所からも察せられようが、期待に違わず、反道徳、反文化、反権力を標榜した刺激的な雑誌であった。

その創刊号の巻頭を飾った特集グラビアが「男の死」という写真競作。作家や俳優が写真家と組んで、「男の死」をモチーフに撮った作品である。アイデア提供者の彼は篠山紀信と組んだ。そして、「聖セバスチャンの殉教」と「溺死」を載せている。『薔薇刑』（細江英光写真、一九六三）と違って、かなりストレートな撮り方である。横尾忠則が、篠山をして「自己を滅却」する写真

家と評した如しである。

これを皮切りに、両者は慌ただしく、最後の年に向かって、このテーマを撮り進める。写真集は、薔薇十字社から、横尾の装幀、澁澤の跋文で刊行される予定であった。契約書も交わされたというが、事件後、未亡人からの要請で刊行延期となり、そうこうする内に、同社は七三年に倒産、写真集は幻と消えた。

それが、半世紀を経た今年、海外の出版社から刊行されたから驚く。(The death of a man. Rizzoli.) 海外発、という辺りが、図らずしもタブーの根深さを語っているように興味深い。

九十頁ばかりの、努めてシンプルに作られた写真集だが、あれほど執心した「セバスチャン」は見当たらず、一方「溺死」は四バージョンも収録されている。写真家のセレクトとは言え、作家の遺志を反映させたものであろう。

その後、日本版も出るには出たが、B2判(!)、限定五十部、価格も五十万円とあっては、もはや投機用の美術品としか思えない。

# 鳥取あれこれ

## その五十二

内田 克彦 (地域研究者)

(承前)

澤田さん所蔵の脚本の表紙には、「新興文化映畫部作品 砂丘の蔭に 共同企劃 農山漁村文化協會 後援 厚生省・農林省(発行 長崎書店)」とあり、次頁に「製作 岡田勲 原作 吉田喜久代 脚本 新藤兼人 演出 落合吉人 撮影 行山光一」とある。前述の「文化映畫製作」の新聞記事と同じ内容であるため、おそらくこの時点での脚本ではないだろうか。

一方、田中さん所蔵の脚本の表紙には、「砂丘の蔭に 農山漁村文化協會 新興東京撮影所 共同企畫」とあり、次頁に「原作 吉田喜久代 構成 岡田勲(ママ) 脚本 新藤兼人 演出 塚田修造」とある。

一九四一年一月二日一三日付けの田中新次郎宛ての手紙に、新藤兼人は次のように書いている。

脚本も漸く出来上りまして、いま所長の許で検討してゐます。そちらに参りますのが少し遅れるかも知

れません。まづ脚本の上で完璧を期したいと思つてゐます(略)

私が吉田さんに案内して頂きました数々のカード階級の人々の身の上が思ひ出されます。あの人たちはこの冬の訪れをどんな気構へと覚悟で待つてゐるかと思ひますと、ある厳肅なものにうたれます。共睦園の人たちの、あの物哀れに打沈んだ表情が、未だに私の胸を去りません。撮影の際にそちらに参りましたら、もう一度共睦園の方々をお見舞ひしたいと考へています。取急ぎまして、脚本の経過報告を致してをきます。

東京撮影所長と検討を終えて田中新次郎宛に送られた脚本が、おそらく田中さん所蔵の脚本であり、この手紙から推測すると、一九四二年の年明け頃にはこの脚本が送られてきたのではなからうか。しかしながら、映画化は進まず、先述の一九四二年五月四日付けの葉書に、新藤が「これ〔筆者注 雑誌『日本映畫』掲載の『天使の顔』のこと〕で何かの機会を作り映画化されるやうなこともあればと思つてゐます」と書くことになつたのではなからうか。『砂丘の蔭』は結局映画化されずに終わった。

ところで、川上裕子著『日本における保健婦事業の成

立と展開―戦前・戦中期―』によって、舟橋聖一著『女の手』があることを知った。次の記述がある。

同書は、保健婦を主人公にその活動や人間関係の葛藤を描いた小説であり、『婦人倶楽部』への連載を単行本化したもの。「国の手」と称される医者に対して、保健婦を「国の女の手」と称したことからそのタイトルが付けられた。1942年11月に映画化(松竹映画)された。

調べてみると、『女の手』は、『婦人倶楽部』に、一九四一年の九月号から翌年四月号まで連載されており、同年四月に大日本雄辯会講談社から発刊されている。舟橋は「序文」に次のように書いている。

はじめ厚生省、講談社、松竹映画の共同企画として話があり、私は喜んでこの仕事を引受けた。しかし無論、内容も主題も構想も、すべて私一人の發想によるものであり、主要人物を保健婦にしたのも、私の考へからである。

結局、保健婦を題材とした映画『女の手』の企画が既に進んでいることもあって、『砂丘の蔭に』の映画化が

できなかったのではなからうか。因みに、映画『女の手』は、主人公宇井哲子を、信千代(へしん ちよ) (舞台名赤木蘭子)が演じ、他に佐分利信、水戸光子が出演している。

さらに、舟橋は、一九四三年には「日本保健婦の歌」を作詞している。二月二七日付けの『讀賣報知新聞』から引用する。

廿八日午前九時、九段軍人會館において保健婦大會が開かれるが、この程、舟橋聖一氏により「日本保健婦の歌」が作詞され、當日席上で斉唱されることになった。

なお、小田光雄著『近代出版史探索Ⅲ』では、キリスト教出版社の「長崎書店」について、一九三八年暮れに発刊した『小島の春』のベストセラー化(最終的に三十万部に達したとされる)、映画化が「早天の慈雨」となった、と記しており、一九四〇年に『砂丘の蔭に』を発刊したのもそのおかげであったのだろう。戦時下の企業統合により、一九四四年「新教出版社」となる。

## 2つの音楽劇 ライブエールプロジェクトに寄せ

て

武中淳彦（秦阜梅林 本名）

（楽人）

ヴァンニ」）亦或る時は反対に、何処にでも居る俗物達の本性、そして愛の不在を（「コジ・ファン・トゥツテ」）まるで「みて来たかのように」。

未来の子ども達の為にはゲーテを継いでサンボリズムに満ちた寓話を（「魔笛」）亦、階級闘争を描きフランス革命前夜の狼煙を上げた「フイーガロ」も現在仏最大紙名にもなつてゝの物語では同時に、現代尚問題となつてゐるジェンダーの問題にロココ調の理想と解決策をコントラスト鮮やかに掲げて見せた、流麗で変幻自在な管弦楽と共に。

一方「スウィング・ジャパン」（仮）は日系二世のミュージシャン、ジミーアラキの生涯を軸に（アメリカの、ではなく）日本のジャズ史を総括する。

戦後進駐軍GIバンドの一員として来日を重ねたジミー（後半生日本文学史に貴重な足跡を遺した話はいずれ亦）ご本人を知り、伝説のモガンボセッションで辣腕を奮つたレジェンド、当年80歳の五十嵐明要氏が会の趣旨に賛同下さり緊急来鳥される：演奏と共に往時を偲びお話し下さるかもしれないのは楽しみ。

戦争という波に吞まれつつ、ジャズが日本でどういう歴史の中発展して来たか？ ドラマを追いかけ乍ら考えてみたい：いずれも生演奏を聴きつつ：主役はあくまで生きた音楽と芝居で綴る舞台ではある。

12月26日（土曜）①倉吉市、於未来中心（新倉企画）  
②鳥取市、於梨花大ホール（菊池企画）2つ音楽劇の台本を書いた。全国的に見れば感染が比較的少ないとはいつつ、多くのアーティストが活躍の場を喪い、不自由を強いられてゐる現状を様々な面から救う趣旨で立ち上げられた県のライブエールプロジェクト※の一環、

①はモーツァルトにスポットを当てオペラ作家としての彼が12歳から生涯に亘って書いたオペラと云うジャンルに訊く：其処で常に描かれ続けたテーマは一貫して「人間」。

彼程、キャラクターを細かくリアルに描き分け、其の心理を深く追及し、人が人に拠つてどう動き、動かされたか。生き生き描いた「劇作家」は居ない。モリエールやシェイクスピアを継いで多くの人間を描いた、或る時は稀大の色事師の性と死を、地獄に墜ちる様迄（「ドンジョ

令和以降これからを担う特に若者達への橋渡しになれば？と：稿を重ね稽古に準備に忙殺されてゐる次第。

2020. 11. 17

※ライブエールプロジェクト、入場無料、要予約。お問い合わせは各会場梨花ホール、未来中心等

### 【今回の一枚】

「ミッドナイト ジャズ セッション」ジミー・アラキ AS. pf 他日本ビクター

### 【もう一枚】

① W. A. モーツァルト「ドン ジョヴァンニ」KV527 全曲 C. シェピ, E. グリュムマー, L. P. カーザ, F. コレーナ, W. ベリー, R. シュトライヒ, L. シモノー他  
ヴィーン phil. / 国立歌劇場合唱団 D. ミトロポウロ  
ス指揮 ザルツブルク音楽祭 1956年7月24日ライブ  
② 同「フィガロの結婚」KV492 全曲 G. バキエ, E. ゼーダーシュトレーム, R. グリスト, H. ベルガンサ, G. エヴァンス他 ニューフィルハーモニア管弦楽団他  
O. クレムペラー指揮 1970年1月録音



イラスト・秦阜梅林

# ヌーヴオー

あきの素生

(くうねるめがね)



冬である。信じられないほど暖かな日が続いたりもしたが、通勤途中にある桜や楷の木が色づいて、秋も終わりがかかっていると感じさせた。そして当たり前のように寒さが戻り、当たり前のように冬になった。

冬になると、赤ワインが飲みたくなる。不思議だなあともいつも思う。ほかの季節は白ワインの方が好きなのに、毎年きっちり飲みたくなるのだ。そんなときは、体の声にあらがわず、おいしくいただくことにしている。銘柄などはよくわからない。でも、ライトボディはあまり選ばない。ワインでも日本酒でも、お酒は辛口、とずっと思ってきたけれど、ほんのり甘味のあるお酒もいいと感じるようになった。少しく素直になったのかもしれない。

小さい頃、「赤ずきん」に出てくる「ぶどう酒」なる飲み物にあこがれた。病気で寝ているおばあさんへのお

みやげが、ケーキとぶどう酒だった(ケーキだっておいしそうだし、大好きに決まっているのだが、子どもなりに味が想像できるからか、そこまで興味を引かれなかった)。藁かなにかが巻かれた小ぶりの瓶に、紫色のぶどう酒がたっぷり入っていて、コルクで栓がされている。赤ずきんに渡されたかごには、かわいらしい布が掛けられ、その布から瓶が少し覗いている。こんな素敵なおみやげを運ぶ赤ずきんのおつかいは、大事な役目に思えたり、病気のおばあさんにわざわざ届けるくらいだから、きつと特別おいしいものに違いないと感じられた。

大人になって、赤ワインを飲むようになって、あの「ぶどう酒」を飲んでいる、という感覚はない。母方の祖母が家に遊びに来るとき、父は決まって「赤玉スイートワイン」を用意していた。髪を結いあげた女性が小さなワイングラスを持って微笑んでいるポスターが印象的な(当時は「赤玉ポートワイン」だが)、甘い甘いワイン。その甘さを祖母が喜んでいた、というのは、実際に見たのだったか、父から聞いたのだったか。私の中の「ぶどう酒」のイメージは、「赤玉スイートワイン」に近いのかもしれない。でも、いわゆる「まんがの肉」のように、現実には再現しがたい、永遠にたどり着けない想像上のおいしさを持つ飲み物であるような気もする。

ボジョレー・ヌーヴォーが今年も解禁となった。十一月が誕生日なので、誕生日は大抵ボジョレー・ヌーヴォーで祝う。

学生時代、一人暮らしをしていたアパートは、校舎からはとびきり近いが、築年数はかなりのものといった物件だった。おかげでお風呂とトイレは別、ただし、室内に洗濯機を置くスペースは無い。外に置かざるを得ないけれど、ただ置いておくと無くなってしまふので、チェーンで排水管などにくくりつけておくように、とアドバイスを受けた。くくりつけ忘れた自転車は、正月明けに戻ってみると無くなっていた。「和」のものに惹かれ、こたつ布団は紺地に和柄、カーテンも紺色に統一していた。そう日の差す部屋でなし、カーテンくらいは明るい色にしておけばよかつたものを、と今では思うが、当時はそれが「気分」だった。

二十歳の誕生日の前日、日付が変わろうかという時分、これまた紺色の綿入れを着て、新しい日記帳に差し向っていた。二十歳になるし、心新たに日記を付けようと考えたのだ。午前零時を回ったとき、玄関から、とんとんと扉をたたく音がした。気のせいかと思つたが、もう一度、とんとん、と音がして、玄関を開けると、友人たちが立っていた（インターホンもない部屋だった）。誕生日おめでとう、と言って、手渡されたのがボジョレー・

ヌーヴォーだった。自分がどんな反応をしたのか、綿入れは扉を開ける前に脱いでいたのか、日記はちゃんとしまったのか、といった事柄についてはほとんど覚えていないけれど、みんなで紺色のこたつに入り、コンビニで買ってきてくれたお菓子を食べながら、言葉少なにワインを舐めたのは、忘れられない思い出だ。

以来、ボジョレー・ヌーヴォーを毎年欠かさず飲んでいる。日記は続かず、あのアパートはどうに無くなったと風の便りに聞いた。それでも、ボジョレー・ヌーヴォーを飲むときは、いつもあの部屋のあの時間に立ち返る。そして思う、心新たにと。





定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室（会場 定有堂二階）葉香クラブ（荷葉）

毎週 ①水曜 十九時半から ②土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員



# 流星群



## ドラマメリア (座敷わらし)

先日出席した科学の本の講座で、今年二〇二〇年のふたご座流星群は十二月半ばに極大を迎えると聞いた。

星には疎いが、一度だけ夜中じゆう流星群を見ていたことがある。しし座流星群。三十三年の周期で大出現し、流星雨を降らせるといわれる。世紀末も近づいたある年、大学生だったわたしは、所属するミステリ研究会有志の観測会に参加していた。UFOの方のミステリ研ではないし、特に天文ファンがいたわけではない。ただみんな暇だったのだろう。「三十三年に一度」の触れ込みに乗せられて、じゃあ見物しようかと思うくらいには。

当日夜。推理小説好きの暇な学生たちが集まった。観測場所にはわたしに住むマンションの屋上選ばれた。キャンパス最寄りの近鉄K駅に近く、田んぼに囲まれた立地。星を見るのに絶好のロケーションだったのだ。

十一月下旬の夜は寒い。天候はあいにくの薄曇りで、お目当ての流星雨はぼつぼつとしか流れない。しかしせつ

かく集まったのだから、ミステリの話でもしようじゃないか。わたし達は自動販売機で買った温かい飲み物をカイロ代わりにしながら、語り合った。あの新作は読んだか。この展開についてどう思うか。そもそもミステリというものは、……。

それはなんと楽しい時間だったことだろう。

〇〇座流星群という言葉を聞くとときどきあの夜を思い出すことがある。晩秋の夜の空気。掌の中の缶コーヒートの温もり。仲間たちとの声をひそめたお喋り。みんなとにかく暇で、とにかく若くて、そしてミステリが好きだった、そんな夜。



### ・編集後記:

今年のお正月は帰省しないことになりそうです。「帰省」と書いて「ムスメの務め」と読んでいたわたしは実のところに嬉しくてしょうがなく、何をやるうか楽しみです。

ドラマメリア (編集長)

三島由紀夫をモデルにした映画や東大全共闘との華々しいドキュメンタリーを見ました。あれから50年。本は新刊の『ヤクザと過激派が棲む街』牧村康正・講談社を読んでいます。こちらは山谷、地べたの話。奈良敏行 (発行人)